

# 靱形埴輪



## ①概要

この靱形埴輪（ゆきがたはにわ）は、行者塚古墳の北東造り出し（つくりだし）から出土したものです。行者塚古墳は、古墳の墳丘から突出した「造り出し」と呼ばれる舞台のような施設が4つ存在する珍しい古墳で、そのうち後円部の一角に取りつく「北東造り出し」は、粘土槨（ねんどかく）を伴う埋葬施設が見つかっており、造り出しが埋葬の場として使われたことがわかります。

この埴輪は、埋葬後に造り出しの上面に並べられたたくさんの埴輪のうちの一つで、盾形（たてがた）埴輪や甲冑形（かっちゅうがた）埴輪とともに、死者が眠る聖地を悪霊などから守る魔除け（辟邪（へきじゃ））の効果が期待されたものと考えられます。

## ②ここに注目！！



靱とは、弓矢の矢を収納する武具です。矢先を上にした状態で収納する矢筒部分と、背負うための背板部分で構成されます。靱形埴輪はそれを模したもので、背板部に鰭（ひれ）などの装飾が付加されます。

行者塚古墳の靱形埴輪は、見つかっていない破片が多く石膏で補っている部分が多いですが、埴輪を構成する主要部分が一通り揃っているため全体の様子を知ることができます。



復元された大きさは、幅68.7cm、高さ108cm以上となります。立体的な箱形として作られた矢筒部分には、先端に5本の矢先が沈線（ちんせん）で描かれ、その他の各部は鋸歯文（きょしもん）、綾杉文（あやすぎもん）、直弧文（ちょっこもん）、円形文などの文様で飾られています。5本の矢のうち、左側の2本は一部が重なっています。この埴輪の製作者は重なりを気にせず、どちらも線で輪郭を描いています。

箱形の矢筒部分は、破片が一部しか見つかっていないため文様は不明です。沈線で描かれた矢先は、矢筒で隠れている部分もしっかり描かれていますが、途中からは破片が見つかっていないため、一番下の矢筈（やはず）まで表現されていたかは不明です。



裏面は、靱を固定するための円筒部分になっています。ベースは円筒埴輪（えんとうはにわ）と同じ作りですが、前面が重いため、それを支えるための支持粘土がたくさん使われます。

各部の表面には、仕上げに施された調整の痕跡（ハケやナデ）や、素焼き（すやき）で焼き上げたときに付く黒斑（こくはん）と呼ばれる黒いシミが見られます。